

## 念佛寺の歴史と調査概要

竹中 友里代

念佛寺の調査は、1995年から翌年にかけて数度の美術工芸品調査が八幡市教育委員会により行われ、本尊阿彌陀如来像の修復や釈迦如来坐像が市の指定文化財となった。同時に古文書調査が行われ、98点の文書が整理され、その後補遺の仮目録と報告が2002年になされていた。2013年から京都府立大学が追加分を合わせて149点の文書目録を採取し、市民有志と共に写真撮影を行った。教育委員会調査の成果を参照しつつ、念佛寺の寺史と文書の概要に触れる。

### 念佛寺の立地と歴史環境

念佛寺は、八幡市八幡旦所1番地に所在する。放生川にかかる八幡橋を渡り、東へ1町ほどの所にある。道を隔てた北向いには同じ浄土宗の正福寺、東に青林院がある。旦所の地名は、安居神事で、この町に住む太夫の家の表に神壇を築くという由緒による。門前には、昭和2年(1927)京都三宅安兵衛による「戊辰史蹟念佛寺」の道標が立つ(写真1、2)。慶応4年(1868)鳥羽伏見の戦いは、正月3日に伏見・下鳥羽から始まり、5日には、淀水垂・納所に戦火がおよび、6日淀大橋小橋が焼け落ち、敗退する幕府軍は、宿院・常盤科手へ大小砲を打ち掛けながら、大坂へ退却した。この戦禍で八幡神領は、612軒が焼亡し、安居橋は焼け落ち、念佛寺も本堂・庫裏等の建物が悉く焼亡した。仔細は不明であるが、この戦で正月5日に淀で討ち死にした大垣藩士渡部右一良・名波常蔵・矢野才治良(行年55歳)の3名が当寺で弔われ、「浄劔清雲居士」の法名を刻んだ名波常蔵の墓碑が所在する(写真3)。



写真1 念佛寺外観



写真2 門前道標



写真3 大垣藩士の墓碑

念佛寺は、元禄5年(1692)の史料(1)によると「開基念誉上人、十四代以前住持也、延宝六年出火、記録焼失年歴不知、百三十年以前永禄年中玆誉上人再興」とある。延宝6年(1678)の火災により寺記

等を失い、当寺の由緒等は不分明であるというが、「男山考古録」には、中古開基は念誉上人で応永2年(1395)正月25日示寂(118頁、資料10)とある。念佛寺は、旧は観音堂と称し、空也上人自作の観音像を本尊としていた。高橋町に大同年間創建の大同寺が退転し、中古の本尊を念佛寺に迎えたという。現本尊の阿弥陀如来坐像は、目鼻は小さく面貌の中央に集め、目は伏し目がちで、穏やかな表情は、定朝様式を忠実に踏襲している。一木造で構造には古い要素を持つが、平安時代末から鎌倉時代の制作とみられ、像高80cmの安定した体軀は、全昌寺・極楽寺・在恩院を塔頭とする大伽藍の大同寺を彷彿とさせる像である。

明治16年(1883)「寺院明細帳」(2)に念佛寺の由緒が記されている。

創立ハ空也上人、開基ナレトモ延宝六年堂宇悉皆焼失ニ付、年月不詳、元徳年度中納

言宗時出家シテ無業ト改号ス、堂宇悉皆再興ス即チ中興ナリ

当寺の創立は空也上人ではあるが記録がなく年不詳である。元徳年間(1329～1331)に中納言宗時が出家し無業と名を改め、堂宇を再興したという。

この無業について「再建有志募縁霊名簿序」(3)をみてみよう。年未詳であるが、明治の本堂再建時に浄財を募るため当時の住職安誉豊道が寺の縁起を取りまとめた草稿である。教育委員会の報告でも取り上げている序文を以下に記す。

元徳年度、閑院家ノ系統竹林院左大臣公衡卿、末男中納言宗時公、落飾法名称無業、此人当庵救世大悲尊霊験募、是ニ来テ口留錫堂舎衰頽ヲ憂、四方勸奨本殿庫院等建築奏朝、天照山光明院念佛寺拜受公称、然ニ此僧弥陀深重信悲願法脈ヲ相承、本宗上世了誉上人座下浄家ノ道場トス、故号当山中興開基正蓮社念ヨ無業トテ、時何年何月也因テ、以来浄宗相統連綿タリ

念佛寺の開基は、元徳年間(1329～1331)に出家した西園寺公衡の末男の中納言宗時、法名無業であるという。無業は当庵の救世大悲尊の霊験を慕い、錫を当地にとどめたが、空也上人が開いた念佛堂場の堂舎が衰頽している様を憂い、四方に勸奨して本殿庫院等を建設し、朝廷に奏して天照山光明院念佛寺という公称を貰い受けた。この僧侶無業は、阿弥陀仏を深く信仰し、法脈を本宗上世了誉上人の座下に相承し、浄土宗の道場としたため、当山の中興開基を正蓮社念譽無業とし、以来当地の浄土宗は連綿と相統されていると伝えている。

ここで無業の出自は、「閑院家ノ系統竹林院左大臣公衡卿」、すなわち西園寺公衡(1264～1315)が父という。西園寺家は藤原氏北家閑院流の堂上家で、家格は撰家に次ぐ清華、琵琶を家業としており、鎌倉時代には関東申次を歴任し、公武間の周旋にあたった名家である。この公衡については、鎌倉時代後期の公卿で、西園寺実兼の長男、母は中院通成の娘中院顕子である。正安元年(1299)に父の跡を継ぎ、右大臣に就任し関東申次となっている。応長元年(1311)8月20日に出家、法名を静勝と称す。以後、入道左大臣、法号竹林院、また竹中殿と称せられ、正和4年(1315)9月25日、52才で没した(4)。さらに公衡は、「春日権現験記絵」(宮内庁書陵部三の丸尚蔵館所蔵)を延慶2年(1309)に一族の繁栄とさらなる隆盛を祈願して制作させたことで知られる。精緻な大和絵の描写と当時の風俗史料としても貴重な絵巻である。公卿補任等によると公衡には実衡・寧子の二子が確認される。宗時は系図等にその名をとどめないが、石清水の祭礼や祈願には勅使として公家が派遣されることから西園寺家と

当地との繋がりとは否定できない。男山に八角堂(阿弥陀堂)が建立され、八幡神の本地仏を阿弥陀とする浄土信仰の盛んな八幡において西園寺家の一流が念仏堂場を開創した考古録(この念誉と同一人物とすることはあながち非とはできない。但し、寺伝の元亨元年(1321)示寂の正蓮社念誉無業大和尚(74頁、歴代住職整理表)とは、年代に齟齬がある。

念佛寺は、後述するように近世石清水八幡宮領内浄土宗三十六ヶ寺組の内に入り、末寺法類等は二十数ヶ寺にも及び神領内の生津村・上下奈良村や河内交野郡や京田辺市大住にもあり、南山城の地方寺院として中心的な地位にあった。明治14年総本山への取調書には、檀家数180戸、現在も多くの檀家数を誇る。

## 念佛寺文書の概要

念佛寺文書は総点数149点で、文書群全体を概観すると大まかに近世に分類できるものが37点で、年紀が明らかで近代以降のものがおよそ60点である。追善供養などの法会で導師が読み上げる諷誦文(42～86号文書、以下号数は念佛寺文書目録文書番号を示す)などが43点ある。



写真4 念佛寺文書

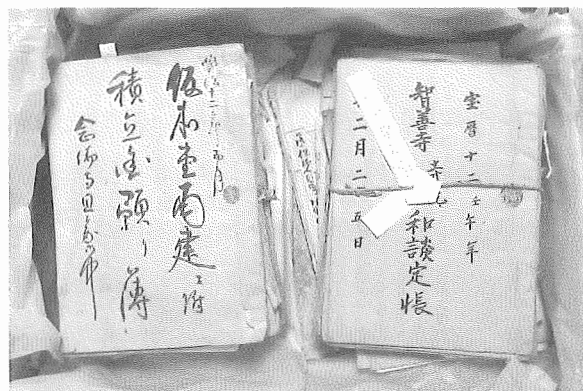


写真5 念佛寺文書収納状況

慶応元年の戦禍で境内堂宇が全焼し、明治12年から32年頃までおよそ20年の歳月をかけて境内諸堂が順次再建された。建物図面や建築申請書・有志寄付金勘定書や積立金預り簿など、関係文書43点である。まず明治12年本堂再建の有志が組織され(2・3・121～124号)、次に住職の住まいである庫裏が明治16年頃(5～12・125・126号)に着手された。本堂は明治28年5月に上棟式(38号)が行われたようで、明治32年頃に本堂天井や内陣の造作を以て本堂が完成した。多くの檀家や関係者が協力した寺の再建事業は明治維新後の八幡門前町の復興の記録である。

近代に入って明治政府・京都府・本山等への報告文書(28・87～94号)は寺院明細帳の写しなどであり、幕末から明治初期に所有していた什物や土地・財産や檀家数が記録されており、寺勢をうかがえる史料である。

近世のものでは本山からの触書をまとめたもの(32・33・36・100・106・107号)や末寺の規定(34号)がある。32・33号は京田辺市大住の両讚寺や八幡の了正庵などの末寺住職が病身や転住によって

交替する時に本山役者への届け出や檀家からの願書、末寺住職の宗旨改めなどが写されている。興味をひくのは33号文書に、文久3年孝明天皇の石清水行幸に随行した帥宮（有栖川宮熾仁親王）より当寺に対して下宿代・井籠料などの下賜金があったこと。慶応元年閏5月に將軍様進発の国恩として念佛寺は金1両2分、両讃寺・来迎寺・智善寺をはじめ末寺10ヶ寺も上納金を納めたことなどが記録されている。京都近郊寺院の幕末の政治動向との関わりを知ることができる。

また明和4年(1767)から同9年の年貢や掛り物の記録(108~120号)によると、念佛寺には納所が置かれており、寺院の年貢や諸入用の出納事務を司る役僧が自坊の所有地だけでなく慶林庵・智善寺・真善庵・了正庵の年貢勘定も行っていたことがわかる。

次に、「当社御修覆ニ付従当務被申渡候一件 念佛寺覚書控」(23号、100頁参照)は、安永7年(1778)2月、石清水八幡宮本殿の公儀修復にあたって、諸役人中へ出勤・退出の刻限を知らせる鐘撞きについての記録である。1日に明六ツ半・九ツ・七ツの三度撞くようにと、正福寺に対して奉行所よりの命が言い渡される。しかし正福寺は無人で寺役で外出する際間違いがあつては気の毒と、七ツの鐘は向かい寺である念佛寺がこれをおこなうように言い渡される。ところが念佛寺の住持は耳が不自由で、他の僧は病身で他は小僧ばかりと再三にわたり辞退を申し入れる。そこで念佛寺旦那惣中より小寺喜六郎・河原崎洩次郎の両人が当職・田中養清より召し出され、檀那衆連判の口上書を提出するよう命じられる。こうした社務と正福寺・念佛寺・檀家中とのやり取りの詳細が記されている。山下寺院に対して奉行所より協力要請をうけて、社務兼官が窓口となり断りの文言の加筆訂正や交渉の過程など詳細な記録である。なお、念佛寺旦那惣代のひとり小寺喜六郎は、紺座町片岡宗与を筆頭とする十七人組に編成される安居本頭神人で、念佛寺の近くの山路町に居住していた。

安政2年(1855)異国船到来により諸国梵鐘供出に関する文書が24・25・35号文書の3点である(翻刻史料参照)。嘉永6年(安政元)6月(1853)浦賀に軍艦四隻を率いて来航したペリーによって開国を迫られ、国内はおおいに動揺し、幕府はその圧力に押され翌年の嘉永7年3月、日米和親条約を締結した。同年9月ロシア艦隊も大坂に入津。我が国は俄に国防を意識し、石清水でも9月23日、異船摂泉の辺りに漂着したことにより、四海無異変国家安静の祈祷が朝廷の命によって行われる。同年12月の太政官符では、五畿内七道諸国司に宛て、近年異国船入津が相続き、諸国寺院の梵鐘を大砲小銃に替替え、皇国の擁護の器となすことが命じられる。これを受けて幕府は翌年の安政2年3月に触れを出す。海岸防御のため梵鐘改鑄、錫・鉛・硝石の類は大砲小銃の必需品なので、今後はこの品は新造出来ない。さらに、銅鉄の仏像等を新に鑄造する事も難しい。仏具も木製・陶器で済まし銅・鉄での製造を禁じている。この触れは、念佛寺には伝存しないが、正法寺文書では公文所権大僧都上野院芳から律家・禅家・正法寺へと出されている(5)。そして大砲小銃が急務品となり、いよいよ諸国の寺院の梵鐘を改鑄するために、寸尺・重さ銘文等を書き記し奉行所へ差出すよう触書(35号)が11月に念佛寺や正法寺、山下に住む社士にも達せられる(6)。一万石以上には領主に、一万石以下は奉行所か或いは代官所において改鑄するのである。この触書による取調べは、本寺の念佛寺(24号)と末寺分(25号)をまとめて奉行所へ提出された。念佛寺と末寺18ヶ寺の所在が書上げられ、いずれも差し出す梵鐘は存在しないと届けている。念佛寺の末寺上奈良村の阿弥陀寺は小堀勝太郎代官所支配であり、

大住村の両讚寺は、旗本天野高三郎知行所、同じ大住村でも来迎寺は京都の尼門跡寺院曇華院領と他領の末寺の情報を知ることができる。

八幡では正法寺の梵鐘調べが行われた(7)。触書にあったように大きさ・銘文の写しに、古来以来の名器および時の鐘ではないが、大旦那尾張徳川家家老の志水小八郎家の先祖寄進の鐘であり、代々將軍の法要に鐘を撞くこと、また塔頭・末寺を従える中本寺であるという正法寺の情報も簡潔にまとめられている。また正法寺の末寺万称寺については、法類の宝青庵から同様に寸法・銘文取調の提出があった(8)。万称寺は、承応3年正法寺即童和尚を開基とし、念仏回向を度々開催し、次第に信者を拡大し、梵鐘は大坂の富裕な商人の寄進と多くの信者によって鑄造され、庶民の念仏信仰の拠り所となっていたが、次第に宗教的色彩が薄れ、文化文政期以降には百姓町人が自治を行う会所的施設として使用されていた。この取り調べにより、安政2年には万称寺は無住となり、不用の梵鐘として鑄替の対象となっている。この触れは、福山藩や水戸藩では、攘夷運動の先鋒として徹底されたが、当地においては実行されたとは思われない。「壬申正月廿一日ヨリ宝青庵伝来之大梵鐘大坂へ売払ニ成万称寺も破却致候様本庄某へ懸合済候由」とあり、宝青庵の大梵鐘とは、無住となった万称寺の梵鐘を指すのであろう。不要とされた梵鐘は明治5年まで残っていたのである。

幕末異国船渡来による幕末八幡の世相をみる好史料であるとともに、山下寺院の所在や梵鐘の有無、その銘文により建立の由緒がまとめられ、山下寺院の様子を知る資料である。

#### 【注】

- (1) 石清水八幡宮蔵、元禄5年「神社仏閣并坊舎寺庵改帳」(『石清水八幡宮境内調査報告書』2011年所収)
- (2) 京都府立総合資料館蔵「寺院明細帳」(京都府行政文書、明治16年)
- (3) 念佛寺文書11号、八幡市教育委員会「念佛寺文書調査報告」(本報告書は、念佛寺住職のご厚意により本調査の参考資料として提供された)
- (4) 「公卿補任」中編、国史大系第10巻、国会図書館近代デジタルライブラリー  
<http://kindai.ndl.go.jp/info:ndl.jp/pid/991100>
- (5) 京都府立山城郷土資料館寄託「正法寺文書」25-419、ほかに『京都町触集成』第12巻 安政2年606号
- (6) 京都府立山城郷土資料館寄託「正法寺文書」7-818・13-66、個人蔵「社士日記」安政2年12月11日条
- (7) 京都府立山城郷土資料館寄託「正法寺文書」7-800~803
- (8) 京都府立山城郷土資料館寄託「正法寺文書」8-210・24-B14-12

# 念佛寺歴代住職一覽

念佛寺住職 福井 純史

世代	歴住名	示寂年月日	西曆	備考
開山	空也上人			
開基	正蓮社念譽無業大和尚	元亨元年	1321	
中興開山	正蓮社念譽無業	応永2年1月25日	1395	「男山考古録」・明治14年取調書による
再興	玆譽上人	永祿年中	1558~1570	
中興	湛蓮社然譽知覺	元龜元年11月21日	1570	寺田念佛寺開山
17世	乾蓮社亨譽眞龍利貞大和尚	元祿5年8月29日	1692	
18世	雲蓮社林譽仙觀良端和尚	元祿9年10月15日	1696	
19世	信蓮社仰譽廓龍大和尚	宝永元年1月22日	1704	
20世	天蓮社仰譽弁椎直阿和尚	享保4年3月21日	1719	
21世	法蓮社忍譽無生含説和尚	享保6年4月10日	1721	
22世	縁蓮社慈譽光阿詮岳大和尚	明和2年7月23日	1765	
23世	本蓮社願譽叶阿知天大和尚	安永8年6月1日	1779	
24世	円蓮社鏡譽照阿満月智傳大和尚	天明8年9月21日	1788	
25世	願蓮社誓譽法阿得解脱知碩和尚	文化11年10月23日	1814	河州交野藤坂生まれ
26世	天蓮社仁譽順阿崇徳辯禮大和尚	天保2年6月15日	1831	
27世	入蓮社重譽妙阿難思議玄門老和尚	嘉永3年4月27日	1850	
28世	梵蓮社一譽智阿佛教門順和尚	安政7年12月13日	1860	文化13年(1816)城州東河原村生まれ
29世	安蓮社民譽崇阿松旭豊充老和尚	明治6年9月25日	1873	天保元年(1838)城州東河原村生まれ
30世	民蓮社安譽興阿松樹豊道老和尚	大正3年10月3日	1914	慶応元年(1865)八幡岩田生まれ
31世	回蓮社晚譽浄阿松龍興道大和尚	昭和2年1月30日	1927	明治28年(1895)大阪三島郡三箇牧村生まれ
32世	眞蓮社鑑譽空阿松瀾周道大和尚	昭和44年12月19日	1969	
33世	敬蓮社道譽周阿自得興忠大和尚	平成23年3月5日	2011	

## 表紙解説

	1 2 3
5	4
(裏)	(表)

1. 西遊寺古文書調査の様子
2. 念佛寺門前（撮影：中井正寛）
3. 念佛寺古文書調査の様子
4. 安居橋から男山を望む（撮影：中井正寛）
5. 八幡清水井の路地田町（たまち）（撮影：中井正寛）



京都府立大学文化遺産叢書 第10集

### 石清水門前寺院・南山城地域の古文書

—京都府歴史資料の調査—

編集 竹中友里代（京都府立大学文学部特任講師）

東昇（京都府立大学文学部 准教授）

発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1-5

京都教区八幡組浄土宗青年会

発行日 2016年3月30日

印刷 双林株式会社

〒601-8106 京都市南区新千本通十条下ル

---